

# 令和6年度 史跡松坂城跡発掘調査現地説明会資料 本丸跡下段 遠見櫓跡 [第19・20次]

令和6年9月7日(土)午前10時～午前11時30分 所在地：松阪市殿町(史跡松坂城跡内)  
調査期間：令和6年2月6日～3月18日(第19次) / 5月20日～8月31日(第20次)  
調査主体：松阪市教育委員会 調査担当：松阪市産業文化部文化課 文化財センター



【写真1】真上からみた遠見櫓調査区 (S=1:100)

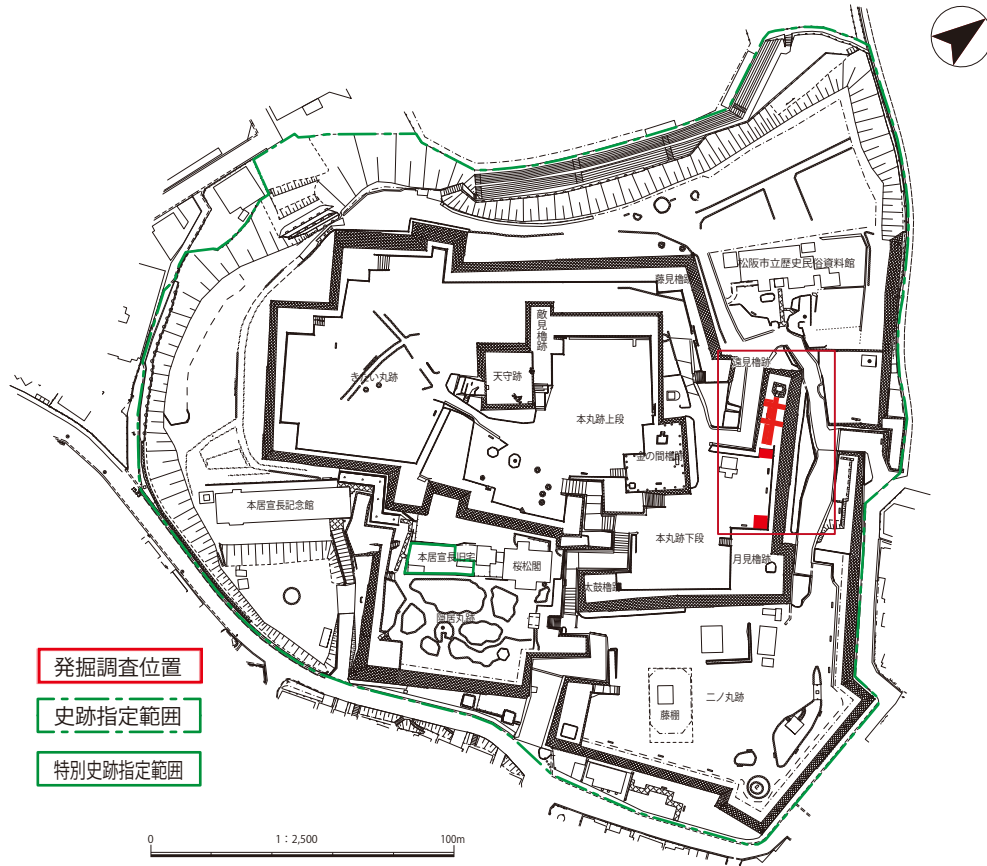
ドローンで撮影した写真を合成して作成 20240704・0723 撮影



松阪市は、国指定史跡松坂城跡を訪れるみなさんが安心・安全に利用・見学していただけるよう、史跡内の整備を計画的に実施しています。整備に伴う工事をはじめる前に、地下遺構の有無及び遺構面までの深さを確認するための発掘調査を継続しています。

昨年の裏門跡に引き続き、今年はおみやぐらあと本丸跡下段の遠見櫓跡と平成9年度に実施された石垣解体修理の際に発見された礎石列及び排水溝の一部を対象とした発掘調査を行いました。

0 S=1:100 5m

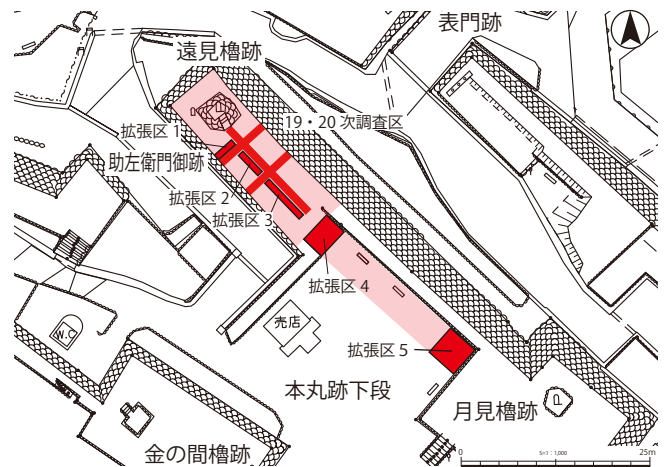


第1図 発掘調査位置図 (S=1:2,500)

松坂城は、天正12年(1584)に近江国日野から松ヶ島城主に転封となった蒲生氏郷が、南伊勢12万石支配の新たな拠点として築いた平山城です。城普請と同時に城下町の整備を行い、天正16年(1588)に入城しましたが、わずか2年後の天正18年(1590)に現在の会津若松に国替えとなります。その後、服部氏・古田氏と城主は代わりますが、その間も城づくりは続けられ、江戸時代に書かれた文献にはようやく古田氏の治世に完成したという記述があります。

元和5年(1619)、松坂は和歌山藩領となり、以後、明治時代まで伊勢国領(松坂、田丸、白子)統治の拠点として機能しました。この間は、木綿等の商いで財を成した三井・小津・長谷川などの有力商人が江戸に進出するなど、この地域の経済の中心地として栄えました。また、『古事記伝』を出版した国学者本居宣長を輩出するなど、学問・文化の中心でもありました。

明治以降、松坂城は公園として整備され市民の憩いの場・観光地として多くの人々に親しまれ今日に至っています。平成23年(2011)には、国指定史跡に指定されました。



第2図 発掘区配置図 (S=1:1,000)



【写真2】発掘調査前の状況(北西から)



## 確認した遺構について

調査の結果、遠見櫓台石垣の一部と遠見櫓と月見櫓をつなぐ多間の礎石及び石塁の一部、排水溝などの遺構を確認しました。

### (1) 遠見櫓台石垣

遠見櫓の先端(歴史民俗資料館側)から10.8m(6間)の地点で、助左衛門御門側の石垣に直交する櫓台を構成する石垣の一部を確認しました。石垣は2段以上積み重なっていたと推察されます。一部の築石ははずされていましたが、基底部分はそのままの状態でのこっていました。この石垣は、表門側に4.3mほどの地点で後述する多間がのる石塁の裏石垣と直交します。このことから、遠見櫓の平面規模は10.8m×7.2m(6間×4間)であることが確定しました。石垣で囲まれた部分の表面は、拳～人頭大の礫(栗石)がびっしりと敷き詰められています。

### (2) 遠見櫓と月見櫓をつなぐ多間に伴う石塁、礎石

平成9年度に実施した石垣修理の際に発見され、復元された石塁の延長部分を確認しました。この石塁は、遠見櫓と月見櫓をつなぐ形で構築されたもので、推定される規模は幅1.8m(1間)・延長41m(22間)になります。

また、表門側石垣の天端から約3.6m(2間)の位置では、一定の間隔(1.8m)で並べられた複数の礎石を確認しました。前述の石垣修理の際には、今回確認した礎石と一連のものとなる複数の礎石が確認されています。

調査の結果から、①遠見櫓と月見櫓は多間でつながっていたこと、②多間は建物の半分を石塁上に載せ、半分を本丸下段側の一段下がった位置に設置した礎石で支えた構造であったことを確認しました。

### (3) 排水溝

両側に自然石をならべた並行する石列2条を確認しました。おそらく助左衛門御門側から多間側への雨水を受け止める目的で設けられた溝と推察されます。石列は排水溝の側壁で、溝にあたる部分は、土や瓦によって完全に埋められていました。

確認できた溝の延長は約7mです。溝底では中御門跡・裏門跡で確認された暗渠排水溝のような連続して敷かれた平瓦は確認できませんでした。

排水溝の延長部分があると予想した遠見櫓側の溝は側壁一石分しか確認できませんでした。また、月見櫓側は調査区外となるため、排水する方向は不明と言わざるを得ません。この溝は、平成9年度に実施した石垣修復工事の際に確認された排水溝の延長線上に位置しますが、途中で石段が構築されているため一続きのものではないと推察されます。



【写真3】遠見櫓台石垣と多間石塁の裏石垣(北東から)



【写真4】多間礎石(北西から)



【写真5】多間礎石と排水溝(北西から)





第3図 今回の発掘調査区と平成9年度試掘調査で確認された遺構の位置関係 (S=1:200)

\*松坂城地形図(松阪市教育委員会 2012)を基に『松坂公園石垣修復工事報告書』(松阪市 2003)掲載の「遠見櫓～月見櫓跡礎石跡平板測量図」及び今回撮影したオルソ写真データを合成して作成



# 出土した遺物について



【写真 13】表土を取り除くと大量の瓦片が……(東から)



【写真 14】徐々に掘下げると更に大量の瓦片が……(北東から)

調査が始まり表土を少し掘下げただけで大量の瓦片が姿を現しました。瓦片の出土状況の記録後、掘り下げると、更に大量の瓦片が…。右の写真でも分かるように、調査区断面は土よりも瓦の方が多いことが分かります。遠見櫓解体時に、溝等を土である程度埋めた後に大量の瓦片を投棄して段差を無くし、瓦層の表面を土で覆っていることがわかりました。

調査で出土した瓦のほとんどは、かつて遠見櫓の屋根に葺かれていた瓦です。瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のほか鬼瓦・道具瓦などがあります。瓦の制作技法や文様等の特徴から、作られた時期は文禄・慶長期(1592年～1615年)と考えられ、服部氏・古田氏が松坂城主だった頃のものの可能性が高いと推察できます。

## 【軒丸瓦】(文禄～慶長期)



本瓦ぶきの軒の先端に置かれる瓦です。巴文で飾られることが多いです。

遠見櫓跡から出土した軒丸瓦は、瓦径 16～17cm、外周にめぐらされる珠文は 16 個、巴の回転方向は右という点が共通します。

## 【軒平瓦】(文禄～慶長期)



## (江戸時代前期)



軒丸瓦とともに軒の先端部を飾る瓦です。一般的に唐草文で飾られます。遠見櫓跡から出土した軒平瓦は中心飾りが三葉で、両脇に太い唐草二巻きが配置されるものが大半を占めます。

## 【丸瓦・平瓦】(文禄～慶長期)



屋根瓦の山の部分を形づくる瓦で、半円形の瓦です。裏側には瓦を作った際に用いた布目・吊り紐などの跡がのこっています。



屋根瓦の谷部分にふかれる瓦で、左右は丸瓦の下に隠れます。裏側に成形する時に瓦を置く台の跡が確認できるものもあります。

## 【道具瓦】(文禄～慶長期)



天守や櫓などの屋根の最も上にあたる大棟を納める瓦のなかまを道具瓦とよびます。

## 【鬼瓦?】



大棟、降棟などの先端に付ける瓦で鬼の顔を表現したものが多くことから鬼瓦と呼ばれます。ここに示したものの全体像は不明ですが、その大きさなどから鬼瓦の一部であると推察されます。

【写真 15】発掘調査で出土した瓦類

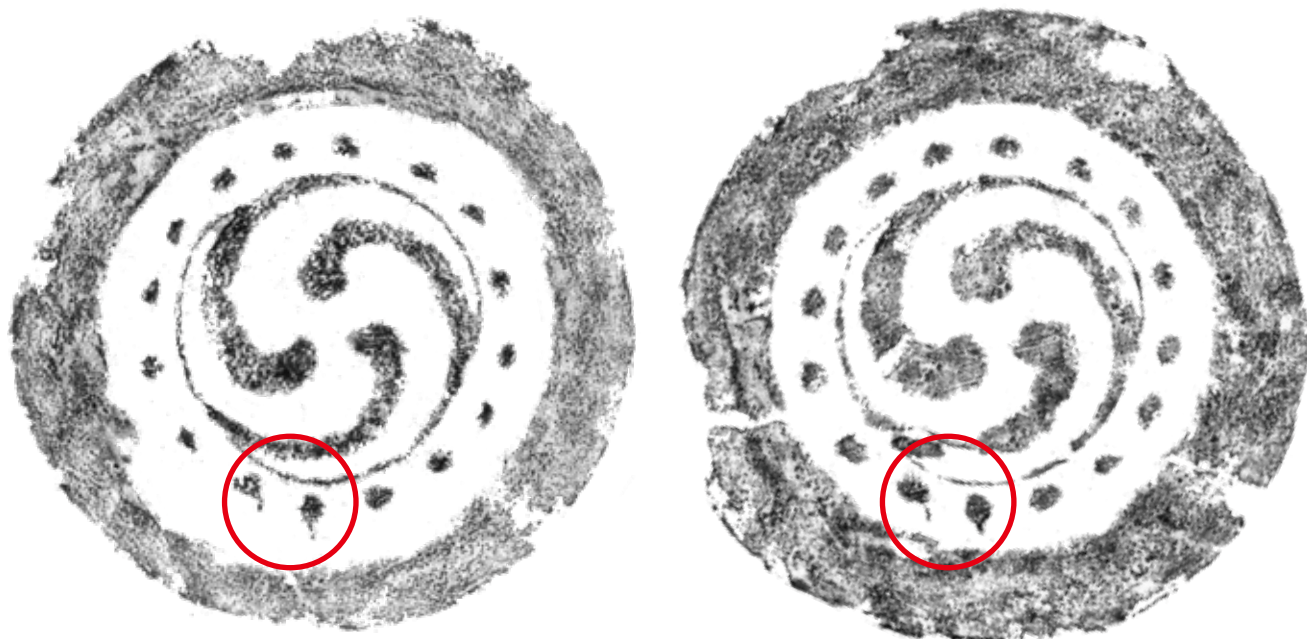
## どうほん 同範瓦について

軒瓦の瓦当などを同じ型から型抜きによって作っている場合、その関係を同範といいます。瓦の形・文様・大きさだけでなく型から瓦に写し取った亀裂などの傷のあとが同範であるか否かの判定基準となります。遠見櫓跡から出土した軒丸瓦を観察すると、文様の同じ位置に範が傷んでできた傷あとが残るものが複数あることがわかりました。この傷は、瓦を大量生産するうちにできた傷を補修せず作り続けたためにできたものと思われます。

同範瓦を調べる過程で、過去の調査で松坂城跡から出土した軒丸瓦を調べたところ、第4図に示したように離れた位置で出土した瓦に同範のもの、その可能性があるものがあることがわかりました。



第4図 同範の軒丸瓦が出土した調査区



軒丸瓦（右巻き巴文、珠文16個）の瓦当の同じ位置（赤丸部分）に同じ範傷（亀裂）が写し取られています。

第5図 同範の軒丸瓦拓本 S=1:2

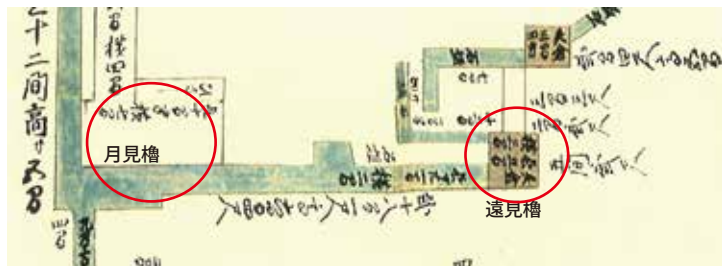


# 絵図等からみる遠見櫓周辺

①『伊勢国松坂古城之図（正保城絵図）』  
正保2(1645)～承応3(1654)年



②『勢州松坂城図（日本分国絵図）』 正保頃



③『松坂旧城絵図面 城内建物絵図面』  
『第九区 伊勢国松坂旧城絵図面』明治7(1874)～10(1877)年と酷似



④『松坂公園平面図』 昭和56(1981)年



①～④は松坂城跡を描いた絵図・地図から遠見櫓と月見櫓の部分抜き出したものです。

①は『伊勢国松坂古城之図』（いわゆる『正保城絵図』）です。この絵図には、遠見櫓・月見櫓の建物が描かれていますが、多聞は描かれていません。二つの櫓を結ぶように描かれている黄色の太線は、石垣の裏石垣であると考えられます。石垣規模に関する記述はありますが、建物等の規模の記述はありません。

②は①と同じ時期の『勢州松坂城図』です。遠見櫓（矢倉）は茶色の四角形で表現されており、平面の規模は長さ五間（14.4m）・幅三間（5.4m）と記述されています。緑色の部分は石垣の表現です。緑色の部分に「長廿一間 横二間」と書かれています。建物の表現はありませんが、今回の調査で確認した多聞の平面規模（延長21間・幅2間）とほぼ一致することから、多聞の規模に関する記述と推察します。

③は『松坂旧城絵図面城内建物絵図面』です。明治時代初期に描かれたもので、公園として整備されていく直前の城の状況を描いた図面といえます。遠見櫓と多聞の建物は表現されていません。隣接する助左衛門御門は表現されていることから、この頃にはすでにふたつの建物はなくなっていたと推察されます。遠見櫓の左側に段差の表現があり、これが今回確認した櫓台を構成する石垣に相当します。

④は石垣解体修理前に作成された『松坂公園平面図』です。遠見櫓～月見櫓間は、幅広い土手状に成形されています。平成9年度に実施された石垣解体修理に先立ち実施された試掘調査により、石垣の裏石垣・多聞礎石・排水溝が確認されたため、現在の姿に復元されました。

このように絵図は描いた人の主観によってその表現が大きく変わるため、実際の状況を正確に示していないことが多々あります。今回の調査は、まさに典型的な事例と言えるでしょう。

松坂城跡では、史跡整備に伴う発掘調査が今後も継続されていきます。調査に進展によって、今回のように誰も知らなかった松坂城の姿が明らかになることが期待できそうです。今後も調査へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。



【写真15】石垣解体前の状況（北西から）